

コロナ禍における学内実習の取り組みと課題 —小児看護学実習にシミュレーションを用いて—

畠 知華子¹⁾ 山下 智美¹⁾

An approach and problem of the training in the study in the corona evil
-For children nursing science training using simulation -

Chikako Hata¹⁾ Tomomi Yamashita¹⁾

1)活水女子大学 看護学部

要旨

コロナ禍の影響で小児看護学実習の臨地実習を学内実習に変更した23名に対して、学内実習で臨地実習と同じ実習目標を達成するために、演習室に病棟と同じ環境作りやスケジュールを設定し、看護師役、患児役、母親役を設定しシミュレーションにて看護実践を行った。その結果、学生は【子どもやその家族との関わり方】、【他学生の看護とメンバーシップ】、【発達段階と病態を合わせたアセスメント】、【入院中の子どもや母親の思い】、【退院後の生活や将来へのイメージ】の5カテゴリについて学べたと感じていた。一方、学内実習で学びにくい、または学べないと感じたことは【患児や家族の反応】、【患児と家族の療養生活の様子】、【実際の親子への関わり】の3カテゴリであった。シミュレーションの学びには、患児の実際の反応がわからないなどの限界があったが、病棟と同様の環境作りやスケジュールによって臨地実習に近い学びができていた。

キーワード コロナ禍 学内実習 小児看護学実習 シミュレーション

I. 緒言

2019年末より、新型コロナウイルス感染症の世界的流行により、世界保健機構（WHO）は、2020年3月11日、パンデミックを宣言した。日本においても2020年3月より、教育機関の一斉休校、4月に緊急事態宣言が発令された。それに伴い、本学においてもオンライン授業を活用する機会が増え、教育の質を担保するため、各教員が準備に迫られた。本学の看護学部看護学科では毎年9月より臨地に赴き、実習が開始される。昨年（2021年

度）は、新型コロナウイルス感染症の蔓延により1月の時点で臨地実習が中止となり学内実習となった。大学によっては、オンラインで代替実習をしているところも多いが、本学では3クルルの学生23名に対して、小児看護学実習を感染に配慮しながらの学内実習とした。日本全国においても医療関係職種等の各学校や養成所などで臨地実習の中止や休校となる事態が発生することになり、臨地実習の代替実習の整備に迫られ、実習の目的を達成するために、試行錯誤することとなった。厚

生労働省からの通達（令和2年）もあり、実情を踏まえ実習に変えて演習または学内実習等を実施することにより必要な知識及び技能を修得して差し支えないと示された。そのため、臨地実習の実習目標を変更せずに、同じ目標設定で学内実習を実施した。

文部科学省の看護学実習ガイドライン（文部科学省，2019）によると、臨地実習の目的は、「学生が学士課程で学修した教養科目、専門基礎科目の知識を基盤とし、専門科目としての看護の知識・技術・態度の統合を図りつつ、実践へ適用する能力を育成すること」としている。また、「病院、施設、在宅、地域等の多様な場において、多様な人を対象として援助することを通して、学生が知識・技術・態度の統合を図ると共に、対象者との関係形成やチーム医療において必要な対人関係形成能力を養い、看護専門職としての批判的・創造的思考力と問題解決能力の醸成、高い倫理観と自己の在り方を省察する能力を身に付けることを目指す。」と示している。そのため、学内実習を臨地実習同様に学修するための体制作りが急務となった。各大学のカリキュラムに位置付けられた臨地実習は、カリキュラムの一環であって、その具体的な方法論は各大学の決定に委ねられている（看護学実習ガイドライン，文部科学省，2019）。コロナ禍となった状況下でも各大学での学内実習の方法は様々であると推察され、同大学であっても領域によって学内実習の方法が統一されておらず、それぞれの領域に任されているという現状である。

全国の看護師 3,037 人（内訳は新人看護師 466 人、2 年目以上の看護師 2,571 人）を対象としたインターネット調査で「病院実習の経験が不足した影響を現場で感じるか」などについて尋ねるアンケート調査を実施している。株式会社クイック（2021）によると、調査結果から、実習不足の影響を実感している新人看護師の

半数以上が実習不足による不安を抱えていたことが明らかになった。また、そうした新人をサポートする現場の負担感も窺がえられたと述べられている。よって、教育機関だけでなく、医療を担っている医療機関に対しても学内実習の方法を検討し、確約していくことは急務であり、看護教育における重要課題である。学内実習であっても学生が安心して学べるシステムや方法を確立する必要性を感じている。今回、学内実習の方法を振り返り、学内実習の効果と課題を明らかにしていきたいと考えた。

II. 用語の定義

学内実習：コロナ禍によって病院での臨地実習が中止となり、臨地実習から大学内の実習室を使用しての学生が看護行為と体験を実施する実習のこと。

III. 研究方法

1. 研究デザイン：記述的研究
2. 対象者：2021 年度小児看護学学内実習を履修した学生 23 名の実習終了時に提出された学内実習についてのアンケート用紙
3. データ収集方法

2021 年度小児看護学実習が臨地実習から学内実習に変更になった 3 つのグループのメンバーに対して、学内実習終了後のアンケート用紙を研究に使用することを説明し、2022 年 12 月に同意を得た。

4. 分析方法

2021 年度小児看護学学内実習終了時に実施したアンケートを使用し分析する。アンケートは、小児看護学実習を担当する教員が独自に作成したものである（以下に示す）。複数選択回答に関しては記述統計により分析する。自由記述については質的帰納的に分析する。記載された内容を精読し、主語・述語からなる単文で区切りラベル化し、類似性に基つきカテゴリー化する。また、カテゴリー内のデータを集計して

記述件数を算出する。分析結果については、小児看護学を専門とする研究者（担当教員同一）で一致を確認する。

＜アンケートの質問内容＞

- 1) この実習後に控えている領域実習は何ですか。
- 2) 小児看護学の授業で学修したことで、学内実習に活用できたものは、どのような内容でしたか。
- 3) 学内実習でよかったと思うものは以下のどれですか。複数回答可。
 - ① 事例設定（ネフローゼ症候群・急性胃腸炎）
 - ② 小児看護師の語り
 - ③ 母親の語り
 - ④ 看護計画報告
 - ⑤ 看護計画予定外の出来事
 - ⑥ その他（ ）
- 4) 学内実習で一番何を学べたと考えますか。
- 5) 学内実習で学びにくい、または学べないと感じたことは何ですか。
- 6) 学内実習で病棟実習をイメージできましたか（4択：できた、まあまあできた、あまりできなかった、できなかった）。
- 7) 6) でイメージできた理由を記載してください。

5. シミュレーション事例と学内の環境設定

1) 受け持ち患者 2 事例

2 事例は小児看護のためのアセスメント事例集（医学映像教育センター、メディカ出版）の VOL.2・VOL3 を使用し、5 日間の学内実習に沿うように設定した。

(1) ネフローゼ症候群 男児 8 歳

症状：眼瞼・下肢浮腫、蛋白尿

治療：ステロイド内服、飲水制限

イベント：腎生検（3 日目）、採血

退院指導

(2) 急性胃腸炎 女児 7 カ月

症状：嘔吐・水様便、発熱

治療：輸液

イベント：点滴漏れ後のルート確保、下痢便の処理として陰部洗浄・オムツ交換

2) 演習環境見取り図（図 1）

病室 2 床、ナースステーション、清拭室、処置室の 4 ブースを演習室に配置した。

3) ロールプレイの役割設定

事例を用いた際のシミュレーションを実施する際は、母親役は、小児看護学実習を担当する以外の教員に依頼するか、時間調整の都合上、小児看護学実習の教員が看護師役、母親役の療法を担うこともあった。

6. 学内実習スケジュールとイベント

学内実習 5 日間の 1 日のスケジュールを

図 1. 病棟見取り図

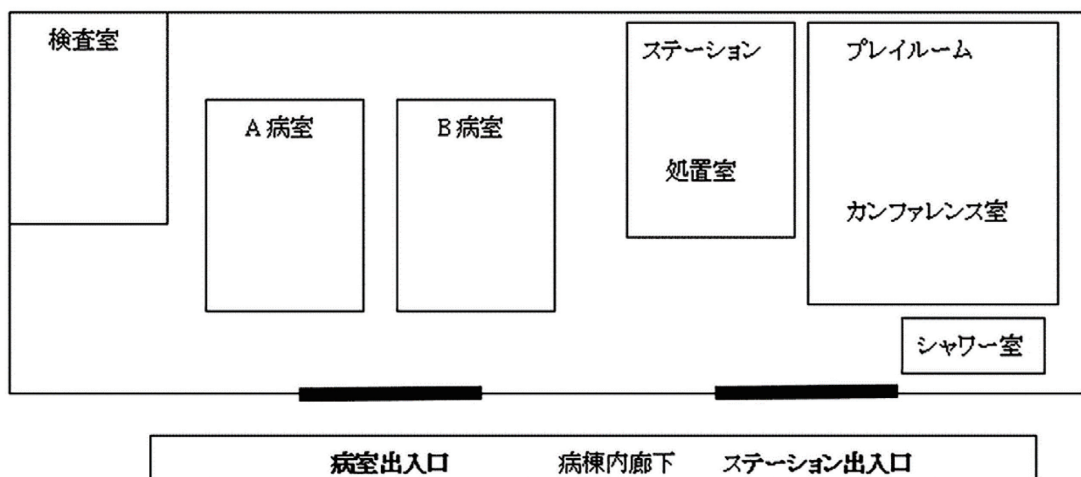


表1に示した。また、事例以外にもスケジュールの合間に小児病棟勤務経験のある看護師と子どもが入院した経験のある母親とそれぞれオンラインでの交流を実施した。時間は約30分～1時間程度とした。

7. 倫理的配慮

活水女子大学倫理委員会の承認を得て実施した。(22-0006号)。研究者より対象者へ研究の主旨、個人情報保護、参加協力や撤回の自由を口頭および文章にて説明し同意書に署名を得た。得られたデータは研究者の鍵のかかるロッカーに保管し5年間厳重に管理し、その後破棄することにした。

IV. 結果

1. 対象者の概要

本学は、3年次の9月より領域別臨地実習が半年間実施される。小児看護学実習は2021年1月よりコロナ禍の影響で臨地実習が学内実習と変更となった。そのため、看護大学3年生10グループ79名のうち、3グループ23名が学内実習となり研究対象となった。各グループの小児看護学実習最終日にアンケート用紙を配付し、その日のうちにアンケートをボックスで回収した(回収率100%)。

大学3年次の各領域別臨地実習の内訳は成人看護学実習Ⅰ・Ⅱ、高齢者実習Ⅰ、精神看護学実習、母性看護学実習、小児看護学実習と6

つの領域である。23名中8名の学生は、精神看護学実習、1名の学生は高齢者看護学実習のみを控えている状況であった。残りの14名は、小児看護学実習が各領域別臨地実習の最終クールであった。

2. 学内実習で活用できたと感じた講義・演習

臨地実習前の3年次前期の講義や演習から学内実習で活用できたと感じたものは何かという問いに対して、自由記載から8つに大別された(表2)。その8つを『』で示す。件数が多

表2. 学内実習で活用できたと感じる3年次前期の講義・演習 n=23

	カテゴリー	件数
1	小児の看護過程の展開	10
2	小児発達段階の特徴	9
3	プレパレーション	8
4	家族の思い・家族への関わり方	3
5	小児のバイタルサイン・身体測定	3
6	小児のフィジカルアセスメント	3
7	小児の清潔援助	2
8	小児用ベッド柵の取り扱い	1

かった順に『小児の看護過程の展開』10件、『小児の発達段階の特徴』9件、『プレパレーション』8件、『家族の思いに対する関わり』、『小児のバイタルサイン・身体測定』、『小児のフィジカルアセスメント』は各3件、『小児の清潔援助』2件、『小児用ベッド柵の取り扱い』1件であった。

『小児の看護過程の展開』は看護過程の講義で1事例を展開したもので、事例は川崎病、発

表1. 学内実習1日のスケジュール

	時間	内容	方法
月 木	9:00	朝の申し送り	管理申し送りに参加、自己紹介、挨拶後に指導者を確認
	9:30	環境整備・情報収集	各事例ごとに分かれて、DVDを視聴し情報収集
	10:30	看護計画打合せ	指導者に本日の計画を伝え、計画検討
	11:00	こどもの状態観察	模擬の病室に訪室し状態観察後、指導者へ報告
	13:00	イベント・退院指導	媒体などを作成し、指導
	14:30	報告	指導者へ報告
	15:00	カンファレンス	学生間または教員がテーマを設定し、午前中に指導者に提示
金	午前中	看護計画発表	全員、事例ごとに発表する
	午後	最終カンファレンス	学内実習を通しての学びの発表

達段階は幼児期前期であった。急性期から回復過程の退院時指導までを展開した。『プレパレーション』は検査・治療・処置に対する子どもの不安や恐怖を緩和する、または子どもの心理的準備を促す関わりである。各グループにプレパレーションを実践してもらった。3つの事例に対し、発達段階に合わせたツール（検査・治療・処置を子どもに説明するための道具）を作成し、それぞれの事例に対してシミュレーションを実践している。シミュレーションの場面は乳児期の吸入、幼児期のバイタルサイン測定、学童期の採血であった。『小児の清潔援助』は、清拭、陰部洗浄、オムツ交換、寝衣交換であり、それぞれ学生個人が演習で実践したものであった。

3. 学内実習で設定されていて、よかったと学生が選択した項目について（複数回答可より）

学内実習で設定した項目を以下〔 〕とする。学内実習で設定したものは、〔事例設定〕、〔小児看護師の語り〕、〔母親の語り〕、〔看護計画報告〕、〔看護計画予定外の出来事〕の5つであった。学べたと感じた項目を複数選択可とした。結果を表3に示した。学生が最も多く選択した

表3. 学内実習でよかったと思った演習内容 n=23

演習内容	選択した学生数	(%)
母親の語り	22	95.7%
事例設定	18	78.3%
看護師の語り	15	65.2%
看護計画報告	12	52.2%
予定外の出来事	11	47.8%

項目は、〔母親の語り〕で23名中、22名(95.7%)が選択していた。入院する我が子に付き添った経験を母親にオンラインで語ってもらった。次に多かったのは、〔事例設定〕であり、23名中18名(78.3%)の学生が選択していた。2事例を3~4人の2グループに分かれ、一事例ずつ提供し、看護実践をシミュレーションで実施してもらった。また、それぞれの事例に対して看

護過程の展開を実施した。〔看護師の語り〕は23名中15名(65.2%)が選択していた。実際に小児看護を5年間経験した看護師とオンラインで繋がり、小児看護の経験を語ってもらった。語りの主な内容は与薬を拒否する患児への対応についてであった。〔看護計画報告〕は23名中12名(52.2%)が選択していた。教員が看護師役をすることで、臨地実習と同様に指導者に看護計画を報告できるように設定した。

〔予定外の出来事〕は23名中11名(47.8%)が選択しており、シミュレーションの合間に予定外の出来事を二つ設定していた。一つ目は、急な嘔吐物の処理に対応する設定で、感染を拡大させないための正しい処理方法を体験してもらったものであった。二つ目は、シミュレーションに設定している7カ月の女児の点滴漏れを設定し、点滴時の観察と再ルート確保に伴うシーネ固定を体験してもらった。その他、設定されてよかったと思うものに対して自由記載を設けていたが、「朝のあいさつで開始し、経過を報告し挨拶で終わる、メリハリをつけて取り組むことができた」とあった。ナースステーションでの挨拶から一日の開始と終了を意識付け、メリハリがある中で学ぶことができたと感じていた。

4. 臨地実習（病棟）のイメージについて

1) イメージできた学生の割合について

学内実習で病棟実習をイメージできたかという問いに対して、できた、まあまあできた、あまりできなかった、できなかった、4択で質問したところ、できたと回答したのは9名であり4割(39.1%)であった。まあまあできたと回答した学生は14名であり、6割(60.9%)であった。あまりできなかった、できなかったと回答した学生はそれぞれ、いなかった。すべての学生がイメージできたと肯定的に捉えていた。

2) イメージができた要因について

自由記載から、3カテゴリーが抽出された

(表4)。以下、カテゴリーを【 】、サブカテゴリーを< >で示した。コードはサブカテゴリーで意味理解できるものであったため、ここでは除いた。

1) 【病棟と同じ環境設定と時間の流れ】

<処置室、清拭室など場所の区切り>、<病棟と同じ環境と時間の流れ>など、病棟と環境だけでなく実践を含めた病棟の1日の時間の流れを意識したことがイメージ化の要因となっていた。

2) 【報告による緊張感】

<リアルな朝の申し送りによる緊張>、<計画発表や観察後の報告によるリアルさや緊張感>がイメージ化の要因となっていた。

3) 【シミュレーションによる実践】

<シミュレーションの役作り>、<患児(モデル人形)に対する看護ケア>、<退院指導の実践>など細かなシミュレーションの役柄の設定や実際に看護ケアの実践や退院指導が病棟と同じ行動となり、病棟実習をイメージする要因となっていた。

5. 学内実習で一番学べたこと

自由記載から学内実習で最も学べたこととして、5カテゴリーが抽出された(表5)。以下、カテゴリーを【 】、サブカテゴリーを< >、コードを「 」で示した。

1) 【子どもやその家族との関わり方】

「退院支援の指導方法やプレパレーションの仕方など、子どもの発達段階に応じた関わりを学んだ」とあるようにシミュレーションにおいて指導やプレパレーションの実践から発達段階に沿った子どもへの関わり方を学んでいた。また、同時に<家族との関わりと信頼関係の重要性>を学び、家族への指導の必要性から<家族への指導方法と指導するタイミング>を学ぶことができていた。患児だけでなく、付き添う家族との関わりを意識することができていた。

2) 【他学生の看護とメンバーシップ】

学内実習のため、メンバーと同じ行動を共にすることが多く、「他の学生の介入をあまり見る機会がないのでそこを見ることで、他の学生からも学ぶことができた」、「同じ疾患を受け持っているメンバーと計画を共有することで足りない部分を補うことができた」など、<他の学生の介入からの学び>を得ることができていた。その一方で、「…メンバーと協力し、周りを見るのが大事だと学んだし、自分を見つめ直す機会になった。」と<メンバーと協力することで内省>することができていた。

3) 【発達段階と病態を合わせたアセスメント】

看護過程の二つの事例から「小児の発達と解

表4. 病棟実習をイメージできた要因

カテゴリー	サブカテゴリー
病棟と同じ環境設定と時間の流れ	処置室、清拭室など場所の区切り
	患児の視点からの環境整備の実施
	病棟と同じ環境と時間の流れ
	患児の回復による時間の流れ
報告による緊張感	臨地実習同様のスケジュールと時間管理
	リアルな朝の申し送りによる緊張
	計画発表や観察後の報告によるリアルさや緊張感
ロールプレイによる実践	看護師への報告するための時間の確保
	シミュレーションの役作り
	患児(モデル人形)に対する看護ケア
	退院指導の実践

表5. 学内実習で一番学べたこと

カテゴリー	サブカテゴリー	主要コード
子どもやその家族との関わり方	発達段階に沿った子どもへの関わり方 (8)	<ul style="list-style-type: none"> ・退院支援の指導方法やプレパレーションの仕方など、子どもの発達段階に応じた関わりを学んだ ・計画を立ててきても、子どもの様子や状態などに応じて計画は変更しながら実施しなくてはならないので、様々なことを考えてくる必要があることは学ぶことができた。 ・一番学んだことは小児期は絶え間ない成長発達をとげる時期であり、小児期の過ごし方はその後の発達や生活に大きく影響をあたえるため、安静指示や治療が見にとってどうであるか考えることが大切だということを学びました。
	家族との関わりと信頼関係の重要性 (8)	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもだけでなく、親の心理面など家族と合わせた介入を考え、ケアしていく重要性が学べた。 ・疾患に対してじっくり考えたり、みんなで考えを出し合ったりしてその子とその家族そった看護の提供 ・子どもや家族との信頼関係を築くことの重要性
	家族への指導方法と指導するタイミング (2)	<ul style="list-style-type: none"> ・家族に対する指導方法、タイミングなどを学ぶことができた。自分が行いたい指導内容を一気に伝えるのではなく、手技の説明などは行いながら、気付いたことや気を付けてほしいことなどを伝えることで相手の記憶に残るということを学べた。 ・指導を行う際は第一段階実演する、次に一緒に確認しながら行う、その次に対象者一人でやってもらい、その後、もう一度確認を行うなどの段階を踏むことが大切であることを学んだ。
他学生の看護とメンバーシップ	他の学生の介入からの学び (3)	<ul style="list-style-type: none"> ・他の学生の介入をあまり見る機会がないのでそこを見ることで他の学生からも学ぶことができた ・同じ疾患を受け持っているメンバーと計画を共有することで足りない部分を補うことができた
	メンバーと協力することで内省 (2)	<ul style="list-style-type: none"> ・実際の病棟実習をイメージしながら取り組んでいたはずなのに、どこか気が緩んでいてメンバーと協力したり周りを見ることが大事だと学んだし、自分を見つめ直す機会になった。
発達段階と病態を合わせたアセスメント	小児の発達と病態と解剖生理 (1)	<ul style="list-style-type: none"> ・小児の発達と解剖生理のつながりと疾患のアセスメント
	病態のアセスメント (3)	<ul style="list-style-type: none"> ・ネフローゼ症候群の病態
入院中の子どもや母親の思い	入院中の子どもや母親の思い(3)	<ul style="list-style-type: none"> ・入院している子どもや母親の様子を想像して看護過程を行ったが、実際に近い感覚で実習ができたため、子どもや母親の思いを理解できた。 ・入院中の患児やその家族の精神的側面
退院後の生活や将来へのイメージ	発達段階を踏まえた退院指導 (1)	<ul style="list-style-type: none"> ・小児は感染症にかかりやすいという発達段階をふまえ、自宅に帰ってから母子、家族が対策していく必要があるということ
	患児や家族の退院後の生活 (1)	<ul style="list-style-type: none"> ・教員が(退院後の生活について)「実際はもっと〇〇だよ」、「こういうこともあるからね」と時折説明を加えてくれたためわかりやすくてできていた。

生理のつながりと疾患のアセスメント」や「病態」を学んでいた。＜小児の発達と病態と解剖生理＞、＜病態のアセスメント＞から、患児の特徴を捉えることができていた。

4) 【入院中の子どもや母親の思い】

シミュレーションでの母親役と学生の会話から、「入院している子どもや母親の様子を想像して看護過程を行ったが、実際に近い感覚で実習ができたため、子どもや母親の思いを理解できた。」「入院中の患児やその家族の精神的側面」を学ぶことができたと感じており、＜入院中の子どもや母親の思い＞に触れることが

できていた。

5) 【退院後の生活や将来へのイメージ】

「小児は感染症にかかりやすいという発達段階をふまえ、自宅に帰ってから母子、家族が対策していく必要があるということ」から＜発達段階を踏まえた退院指導＞を学んでいた。また、「教員が(退院後の生活について)『実際はもっと〇〇だよ』、『こういうこともあるからね』と時折説明を加えてくれたためわかりやすい」と＜患児や家族の退院後の生活＞を教員の指導からイメージすることができていた。

6. 学内実習で学びにくい、学べなかったこと

自由記載から学内実習で最も学べたこととして、3 カテゴリーが抽出された（表 6）。

1) 【患児や家族の反応】

「実際の児でなく、人形であるため対象の児の様子をとらえにくいと感じた」、「患者さんの表

表 6. 学内実習で学びにくい、または学べないと感じたこと（自由記載から）

カテゴリー	サブカテゴリー	主要なコード
	患児の動きや反応 (9)	<ul style="list-style-type: none"> ・実際の児でなく、人形であるため対象の児の様子をとらえにくいと感じた ・患者さんの表情・反応・発達段階を実習に見れるわけではないため難しかった ・一日の行動計画が紙媒体で配られたため行動を把握しやすかったが、児の実際の動き方ははじめはイメージしづらかった。（下痢便による）皮膚トラブルがイメージできない。 ・モデル人形であったため、ディストラクションの効果の実際がわからない ・児の反応がわかりにくく、遊びについてもわしくわからなかったと感じた ・実際に動く患児ではなかったため、実際の感じは少し分かりにくかった ・実際の子どもの反応がわからなかった
患児や家族の反応	患児の表情や心情 (8)	<ul style="list-style-type: none"> ・表情とか症状による活気の様子、どのような遊びが得に気に入っているのか ・子どもたちがどのような表情や感情をもっているのか ・患児の表情や態度から読み解く力 実際の関わり方 ・患児の実際の表情や言動、心境、反応 ・患児が全力でケアを嫌がるような場面
	家族の表情や心情 (7)	<ul style="list-style-type: none"> ・患児や家族の表情反応 ・子どもや家族の実際の反応・表情 ・親の疲労など ・患児や家族をイメージしにくかったので看護過程に反映させにくかった ・学内実習では、患児と付き添っている母親のことしか見えなかったが実際は父親や兄弟、祖父母の関わりがみれたと思った
患児と家族の療養生活の様子	時間の経過に沿った回復過程 (4)	<ul style="list-style-type: none"> ・急性期→慢性期→回復期となる過程がとびとびになり少し難しかった ・事例が3週間とんだりしたので経過が急に変化したことが少し学びにくかったが急性期回復期の学習ができたと感じた。 ・看護過程の展開の中で事例の動画を視聴する際、途中の流れや様子がないため、理解するのが難しく感じた。 ・DVDではすぐ時間が進んだりして、実際に患児がどれくらい安静にしているのかとか、どんな生活を送っているのかが明日の計画を立てるのに悩むときがあった。
	入院中の患児とその家族の生活 (2)	<ul style="list-style-type: none"> ・家族との関わりができないぶん、実際に家族と児がどのような入院生活を送っているのか ・学べないと感じたのは患児の病棟での生活。
実際の親子への関わり	実際の親への関わり (3)	<ul style="list-style-type: none"> ・実際の関わり方の難しさ（お母さんへの指導の難しさ） ・親子の関わり ・看護師と親の関わり方の実際をみて学んでみたかった
	実際の患児への関わり (2)	<ul style="list-style-type: none"> ・患児の表情や態度から読み解く力 実際の関わり方 ・実際の関わり方の難しさ（バイタル測定の難しさ）

情・反応・発達段階を実習に見られるわけではないため難しかった」など＜患児の動きや反応＞の捉えにくさがあった。その他に、「表情とか症状による活気の様子、どのような遊びが得に気に入っているのか」、「子どもたちがどのような表情や感情をもっているのか」など＜患児の表情や心情＞がわからない、「患児や家族の表情反応」、「子どもや家族の実際の反応・表情」など＜家族の表情や心情＞がわからないと感じていた。児の反応である表情や遊びの様子、泣いているなどの態度面が分からないというものゝ児に対する反応だけでなく親の疲労具合や心情などがわからないというものが全体のコードの半数以上であった。

2) 【患児と家族の療養生活の様子】

主にネフローゼ症候群の事例に対して、「急性期→慢性期→回復期となる過程がとびとびになり少し難しかった」、「事例が3週間とんだりしたので経過が急に変化したことが少し学びにくかったが急性期回復期の学習ができたと感じた。」など、＜時間の経過に沿った回復過程＞のスピーディさに学びにくさを感じていた。使用した事例の動画では病状が回復していく過程が、約1か月をまとめたものであったため、設定を5日間の病棟実習の流れにスケジュール調整をしたが、＜入院中の患児とその家族の生活＞に学びにくさを感じていた。

3) 【実際の親子への関わり】

「実際の関わり方の難しさ(お母さんへの指導の難しさ)」、「看護師と親の関わり方の実際をみて学んでみたかった」から＜実際の親への関わり＞を学べなかったと感じていた。また、「患児の表情や態度から読み解く力 実際の関わり方」、「実際の関わり方の難しさ(バイタル測定)の難しさ」から＜実際の患児への関わり＞について学べないと感じていた。

V. 考察

1. 学内実習の効果と課題について

学内実習で臨地実習と同じ実習目標を達成するために学内実習を臨地実習のように、考え行動できるものにする必要があった。そのため、主に病棟実習をイメージできるようなリアルな環境作りと事例などを活用したシミュレーションを行った。研究対象の23名は、病棟実習をイメージできたと肯定的に捉えていたことから、小児病棟での実習のイメージ化は図れたと考えられた。奈須(2017)は具体的な文脈や状況を豊かに含みこんだ本物の社会的実践への参画として学びをデザインしてやれば知識が本物となり、現実の問題解決になるのではないかと述べている。また、本物を持ち込むことで思考がリアルに繋がるとも述べていた。今回、病棟と同様のスケジュールだけでなく、環境も設定した。病室2床、ナースステーション、清拭室、処置室の4ブースを演習室に配置し、シミュレーションによる実践をしたことは、小児病棟のイメージができたとして学生が肯定的に捉えられたことに繋がっていた。シミュレーションにおいて、多くの学生が子どもやその家族の関わり方を学べたと感じ、看護師の行動や視点を多く学ぶことができていた。しかし、学内実習で学べたと感じることはできなかったこととして、【実際の関わり方】が抽出されたことから、関りや看護は学べたと感じる一方、実際の関わりはどうかという思いがあると推察された。看護師役、母親役は教員が代役をしたが、患児役はモデル人形を活用したため、特に患児の反応について学べなかったという意識があった。【患児や家族の反応】が学べなかったと感じている根底には、実際の反応はどうかであるのかという思いが強かったと考えられる。臨地実習の代用と考えることで、授業の一環である演習とは違い、学生が臨地実習に対する期待も大きく、実際の実習では生身の人間との関わりがあるということと比べてしまうと物足りなさを感じたと推察された。小児は年齢的に模擬患者の設定が難しく、教員や学生

が患者役となるため、代役に限界がある。そのため、小児の反応によって、看護実践が修正され実施されるような事例の展開も必要であると考え、詳細な患者の反応についてシナリオを準備する必要があることが今後の課題であると考えられた。

より現実に触れるための工夫点として、実際の母親の語りから【入院中の子どもや母親の思い】を学修することができていた。アンケートの結果から、学内実習でよかったと感じたもので一番多く選択されたものは、「母親の語り」であったことで、実際の母親の反応が学べていたので学習の補足となっていた。

学生はく時間の経過に沿った回復過程が学びにくいという意識があり、学生は時間の流れに関して、実際との違いを感じていたことがわかった。病棟と同様の1日のスケジュールで学内実習を実施したが、実習期間と回復過程に時間のずれがあった。ずれが生じたひとつの要因として、シミュレーションで用いたDVDの時間の流れと、計画したスケジュールに相違があったためだと考えられる。山口(2022)は学内実習で動画を用いた教育方法の効果として、9割以上の学生が臨地実習のイメージトレーニングに役立つと述べていたことを明らかにしていたこともあり、本研究でも動画を用いることで、患児の様子がイメージ化されることを期待していたが、もともと、学内実習を意識した動画ではないため、場面の間隔が大きく空くことで学生の思考に混乱を生じさせた可能性もある。学内実習にDVDを活用する場合、時間の経過を意識し、設定する必要がある。動画を用いるときは設定に頼り過ぎない部分的な活用など、一日の流れや実習期間の時間の流れを吟味してスケジュールを組む必要があると思われる。また、山口(2022)は動画では見えない部分もあり、家の構造や利用者を取り巻く環境など情報が足りない部分もあったとも述べている。本研究

では、退院指導において、退院後の生活をイメージすることは難しいと思われたが、教員の「実際はこうであるという」説明にイメージ化が促進されていた。教員のシミュレーション中の声掛けによる補足が退院後の生活や将来のイメージに繋がっていた。教員は常に学生の認知を確認しながら、イメージできるように臨機応変に関わるよう、意識することが大事であると考え。

2) 学内実習の強みについて

学内実習で学べたこととして、【発達段階と病態を合わせたアセスメント】とあったように、学内実習では、シミュレーションの実践以外に記録や自己学習の時間を取りやすかったため、丁寧に病態を調べ、アセスメントに取り掛かることができた。その他、【他学生の看護とメンバーシップ】について学内実習の効果を発揮できていたと思われる。臨地実習では、普段は他学生の看護を見る機会がないが、同じ演習室で互いのアセスメントや看護実践に触れることができ刺激をもらうことができていた。山口(2022)は共通の動画を見て、学生同士で情報を共有することでイメージしやすく身体・心理・社会的側面を捉えやすかったと述べており、動画から見える現象に合わせたシミュレーションを実施しながら学生同士のアセスメントや看護実践を確認し合うことで相乗効果となっていた。野村ら(2021)は、学内実習の学びとして、学生は自分自身を振り返り、自己成長の機会としていたと述べていることから、他学生と自身の看護を比べることで、自己の成長に繋げていた。よって学内実習では、協同学習ができるような設定がより効果的であると考え。

2) 実践に役立つ学びにするために

病棟と同等の環境設定と事例からシミュレーションをしたこと、1日の時間の流れを意識し、朝のナースステーションの申し送りから、1日のスタートとすることで、学生に病棟と同

じ緊張感をもたらしていた。また、予定外の出来事を1日の流れに組み込むことで、飽きずに緊張感を維持して取り組むことができたと考えられる。病棟をイメージできた要因のひとつに【報告による緊張感】があったが、指導者として、教員が学生にコメントすることが大きな刺激になったようであった。

また実習同様のスケジュールだったため、本当の病棟実習のようであったと＜臨地実習同様のスケジュールと時間管理＞はとても重要であることが分かった。また、細かなシミュレーションの役割の設定や回復過程や突発的な出来事などにより、リアルさをだすことが病棟実習の緊張感に繋がり、病棟それが能動的なまなびに繋がり、更に指導者にリアルに報告することが学生の意識を高めたと考えられる。実践に役立つ学びと捉えさせることに対して、鈴木ら(2018)は単純なものでよいので、現実世界にありそうな問題に取り組ませることで、すぐに役立ちそうな場면을学習者が意識することと述べていた。つまり、本物に近づけることでリアリティが増し、実感や関心ごとに引き付けて主体的に学修することに繋がる。各々の学生の思考や行動によって毎回シナリオが変化し複雑化することもあるがシナリオが本物であれば、既習学習を活かして駆使しながら、学生自身が思考や判断を進めることができると思われた。今回、学内実習でシミュレーションを用いたが、役割が看護師、母親、患児を中心に実施している。そのため、実習目標のひとつである「小児保健医療チームとの連携と望ましい小児看護のあり方と役割を考察できる」については、学びとして抽出されなかった。野村ら(2021)は、学内実習では多職種連携のチーム医療についての学びが少なかったと述べており、本研究でも学内実習のシミュレーションだけでは困難を要した。しかし、本学では病棟実習以外に他施設の1日見学実習があ

り、そこで多職種連携について学ぶことができているため、本研究では課題としてあえてあげていない。

VI. 結論

1. 学生は学内実習において、学べたと感じたことは、【子どもやその家族との関わり方】、【他学生の看護とメンバーシップ】、【発達段階と病態を合わせたアセスメント】、【入院中の子どもや母親の思い】、【退院後の生活や将来へのイメージ】であった。
2. 学内実習で学びにくい、または学べないと感じたことは【患児や家族の反応】、【患児と家族の療養生活の様子】、【実際の親子への関わり】であった。
3. 学内実習からシミュレーションや動画を取り入れることで、より患児や家族の反応を捉えること、関わり方を学習することができていたが、学生は、実際の関わりはどのようなかと危惧していた。
4. 母親の語りや小児看護を経験した看護師とオンラインであったが、交流することで、実際の思いや関わり方を学ぶことができていた。
5. 学内実習では、患児の回復過程としての時間の流れをつかみにくく、動画で使用する物語の時間の流れに、学内実習のスケジュールの整合性を持たせる必要があった。

COI

調査・論文作成に関連し開示すべき利益相反はない。

文献

- 1) 一般社団法人 日本私立看護系大学協会 (2022). シミュレーション教育の導入に必要な基礎知識 シミュレーション教育シナリオ集
- 2) 株式会社クイック (2021). 2021年春の新人看護師に関する新型コロナの影響

<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000050.000010301.html>

- 3) 文部科学省 (2019). 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会第二次報告 看護学実習ガイドライン
- 4) 野村美紀, 奥井良子, 長嶋祐子 (2021). コロナ禍における成人看護学実習の学生の学び-臨地実習と学内実習の両方を体験した学生の学びの認識-. 駒沢女子大学 研究紀要 【人間健康学部・看護学部編】 4. 59-70. https://www.mext.go.jp/content/20200330-mxt_igaku-000006272_1.pdf
- 5) 奈須正裕 (2017). 資質・能力と学びのメカニズム. 東洋館出版社
- 6) 大森美保 (2022). コロナ禍における看護学生の臨地実習の代替実習に関する文献検討. 提供科学大学紀要 18 , 157-164.
- 7) 鈴木克明・美馬のゆり (2018). 学修設計マニュアル「おとな」になるためのインストラクションデザイン. 北大路書房.
- 8) 山口裕子, 村瀬美香, 松本佳代, (2021). 臨地実習時間の短縮に伴う動画を用いた学内実習における教育方法についての報告～在宅看護実習での学生アンケート結果から～. 熊本保健科学大学研究誌 18, 103-115.

An approach and problem of the training in the study in the corona evil
-For children nursing science training using simulation -

Chikako Hata¹⁾ Tomomi Yamashita¹⁾

Abstract

For the 23 students who changed their pediatric nursing practice clinical training to on-campus training due to the effects of the corona crisis, we created the same environment and schedule in the seminar room as in the ward in order to achieve the same training goals as the clinical training in the on-campus training. Nursing practice was performed in a simulation by setting the roles of a nurse, a patient, and a mother. As a result, students were able to assess [how to relate to children and their families], [nursing and membership of other students], I felt that I was able to learn about the 5 categories of "post-life and image for the future". On the other hand, there were three categories of things that were difficult or impossible to learn in the on-campus practical training: [the reaction of the patient and family], [the state of the patient and family's recuperation life], and [the actual relationship with the parent and child]. Learning through simulation had limitations such as not knowing the actual reaction of the patient, but by creating an environment and schedule similar to those in the hospital ward, we were able to achieve learning that was close to clinical practice.